

看護方法の根拠を学ばせる実験実習の展開方法と学生の反応

關戸啓子*¹ 深井喜代子*¹

要 約

看護学生に看護方法の手順だけを教えるのではなく、その根拠から理解できるように教育することは重要である。そこで、看護方法の根拠を学ばせる実験実習の方法を試行錯誤しながら開発してきた。現在では、6項目の実験実習を固定して実施している。この実験実習に対して、学生にアンケート調査を行ったところ、約98%の学生が「実験実習はあった方がよい」と回答し、約94%の学生が「実験実習は意義が大きいと思う」と回答した。

実験実習に対する学生の反応は良く、今後多くの看護教育の場で、実験実習が実施されることが望まれる。

はじめに

看護教育において、学生は基礎看護学の領域で看護方法を学習する。看護方法は、臨床看護に共通する基本的な技術であり、教育上重要であることはいうまでもない。しかし、学内実習として教科書どおりの手順を覚えるだけの実習では、学生は時間とともに手順を忘れていく可能性が高い。また、看護方法は対象の状態や環境に応じて適切に応用されなければならない。さらには、看護方法は看護学の進歩によって変化していくものである。このようなことから、学生には看護方法の手順だけではなく、その根拠から学ばせる必要があると考えられる。そこで、本学科では1995年の開設以来、看護方法の学習に、なぜその方法が選択されているかという根拠を学生たち自らが実験をすることによって確認する実験実習を取り入れてきた。最近になって、理論的根拠を検証させながら看護方法を教育しようとする動きがはじまり、その実践報告^{1,2)}や実験実習を取り入れた教科書³⁾もみられるようになった。しかし、報告されている実践^{1,2)}をみると、ひとつの単元において試みとして実験実習を取り入れているのであり、まだ系統的に実践している状況ではない。教科書³⁾も、単元ごとに実験の案を示しているだけであって、具体的な実験方法が記載された実習書ではない。

このような状況のなかで、本学科では実験実習を系統的にほぼ単元ごとに組み立て、独自の実習書を作成して実施している⁴⁾。看護方法の教育に実験実

習を導入するにあたっては、その教授方法を試行錯誤しながら開発、実践してきた。現在6項目の実験実習を取り入れているが、それぞれの実験実習の内容について個々に検討した結果、一応の成果はあげていると考えている⁵⁻¹⁰⁾。この6項目の実験実習は、共通する展開方法によって実施されている。そこで、今回は6項目の実験実習全体を対象として、その展開方法を中心に学生の反応について検討を行う。そのために、まず実験実習に共通している展開方法の実際を報告する。次に、全ての実験実習が修了した直後の学生へアンケートを行い、実験実習全体に対する学生の反応を調査した結果から、今後の実験実習のあり方や方向性について考察を加える。

看護方法の根拠を学ばせるための
実験実習の展開方法

1. 実験実習の位置づけ

看護方法の教育は、1年次生開講科目である「看護方法論I」と「看護方法論II」において、それぞれ90時間、学内実習の形態で行っている。各単元は、著者らが独自に開発したステップ・アップ方式に基づいて教育している。表1に示したとおり、ステップ1からステップ4まで段階を追って組み立てている。実験実習は、このステップ・アップ方式のなかで最終段階に位置づけている。実験実習を確実にを行うためには、看護方法の手技が習得できていることが条件になるためである。

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科
(連絡先) 關戸啓子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

表1 「看護方法論I・II」の組み立て方
—ステップ・アップ方式—

ステップ1	対象の理解<生物学的・心理社会的モデル> 看護方法を理解する上で基礎となる部分
ステップ2	看護方法の理解<看護学的モデル> (意義, 目的, 適応, 必要性, 種類等と看護技術を実施する上での実際の準備物品や手順, 手技等)
ステップ3	手技実習と実技テスト
ステップ4	実験実習

2. 実験実習の開発過程

実験実習は、原則として单元ごとに計画している。前述したように、看護方法の教育に実験実習を取り入れることは萌芽的で教科書となるような書籍もないため、実験内容は教員が専門性に依拠して案を作り、担当教員全員で話し合いながら創案してきた。実習書はすべて教員の手作りである。

具体的な開発の過程は次のとおりである。

- (1) 「看護方法論 I」「看護方法論 II」の講義計画から、実験実習を導入する单元を選択する。
- (2) 各单元ごとに分担し、ひとりの教員が主になって実験実習の案を作成し示す。
- (3) 示された案について、次の観点から担当教員間で協議する。
 - ① 看護方法の根拠の理解に役立つか
 - ② 学生の学習進度との関係に無理はないか
 - ③ 学生で十分実験が可能な範囲か
 - ④ 倫理的問題はないか
 - ⑤ 実験機器は学生数そろっているか
 - ⑥ 実習時間内に終了するか
- (4) 教員だけで実際に実験を実施してみる。
- (5) 実施したことによって明らかになった問題点を検討し、実験実習の案を改善する。
- (6) 改善された案によって、実習書を作成する。
- (7) 実習書を用いて実験実習を実施する。
- (8) 実験実習終了後、担当教員間で反省会を持ち、学生に実施して明らかになった問題点を出し合い、次年度への課題とする。
- (9) 学生が提出した実験実習のレポートは、担当教員全員が読み、学生の反応や理解度からさらに実験実習の内容を再検討する。

以上のような過程を繰り返しながら、実験実習の方法に改善を加え実施してきた。

3. 実施している実験実習の内容

実験実習は、現在では次に示す6項目にはほぼ固定してきており、例年実施している。

- (1) 室内環境に関する実習
- (2) 清拭に関する実習

- (3) 食に関する実習 A: 嚥下と体位及び食物形態
- (4) 食に関する実習 B: 味覚
- (5) 罨法に関する実習
- (6) 排泄に関する実習

「看護方法論 I」において4項目、「看護方法論 II」において2項目実施している。各実験実習の目的と方法の概要、時間数は表2, 3に示すとおりである。

4. 実験実習の進め方

実験実習の1~2週間前に、事前に実習書を学生に配付し実験の概要を説明しておく。それに従って、学生は当日の役割を決めたり、データの記録用紙を作っておいたり準備をすすめる。被験者は服装や食事に事前の調整がある場合もあり、実験内容は早めに説明するよう計画している。

実験実習終了後、学生はレポートを提出する。実験レポートとして実習目的・方法・結果・考察・文献・感想の順で記載するよう指導している。

5. 実験実習の評価

学生が提出する実験実習のレポートは、担当した教員全員が読み、学生の理解度を評価するとともに、次の指導や実習内容の見直しに役立てている。そのレポートより読み取った内容を元に担当教員間で議論した結果、現在行っている実験実習の効果として次のようなことが挙げられた。

- (1) 看護方法が手順の暗記ではなく、根拠を持った方法として理解できるようになってきている。
- (2) 根拠から学ぶことによって、看護方法を対象に合わせてどのように応用すべきかを、自分で考えるようになった。
- (3) 被験者として体験したこと、またその時の気持ちを表現したことによって、対象の立場を考えて看護方法を実施しなければならない認識が強まった。

また、実験実習を教授方法として評価してみると、学生は実験内容に興味を持って、熱心に生き生きと取り組んでいる。実験実習は学生の探究心を喚起し、知的な興奮を生み出しているのではないだろうか。トニエラ¹¹⁾も、学生が関係や意味を発見できるように、一つの局面から他の局面へと思考を自由に発展させられるような確かな手段を提供することにより、教師は学生の関心を助長させることができるのであり、こうした環境のなかで、学生の好奇心や探究心は発揮されると述べている。さらに、このような学習体験は記憶に残りやすいといわれており¹²⁾、実験実習は教授方法としても優れていると考えられる。

表2 「看護方法論 I」で実施している実験実習の概要

「室内環境に関する実習」(6時間)	
<p>【目的】 環境は身体的にも精神的にもさまざまな影響要因となり、対象に快・不快をもたらす。よって、今回は、看護の対象における物理的環境要因の一部として温度・湿度・照度・騒音に焦点をあて、病床環境と大学内生活環境を実際に測定することによって環境調整の大切さを確認する。また、得られたデータを実際の援助に生かせるようにまとめる。</p>	<p>【方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 病床環境測定—家庭療養の場合— 和室実習室の中央に布団を敷き、被験者は布団で寝た状態にいる。この状態にさまざまな状況を設定して、温度・湿度・照度・騒音と被験者の気持ちを記録する。 —状況設定の例・騒音測定の場合— (1)被験者の両側に学生が一人ずつ座り声の程度を変えて、学生二人で話をする。 (2)台所で流量を変えて水を流す。 2. 病床環境測定—病院療養の場合— 実習室の角に、スクリーンで病室に近い状態を作り、被験者はベッドに寝ている。この状態にさまざまな状況を設定して、温度・湿度・照度・騒音と被験者の気持ちを記録する。 —状況設定の例・騒音測定の場合— (1)被験者が寝ている側を、清拭の準備物品を乗せたワゴンが通る。 3. 大学内生活環境測定—本大学構内— 大学内において、ありのままの状態を測定する。
「清拭に関する実習」(6時間)	
<p>【目的】 清拭を実施するためには、はじめの温度によって清拭の際の湯温がどのように変化するか、また清拭の際、体表の温度はどのように変化するか、それが湯温や実施時間、環境設定の影響をどのように受けるか等を、基本的知識として知っておく必要がある。そこで、多くの教科書に書かれている手順が本当に妥当であるかどうか、実験実習によって定量的に確認する。</p>	<p>【方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 放置した湯温の変化 清拭用バケツに50℃、54℃、58℃の湯を10ℓずつ準備し、湯温の変化を経時的に測定する。沐浴剤を入れた湯の場合も同様に計測し、比較する。 2. 臥床中の皮膚温 皮膚温測定機器(サモロック)によって、安静臥床している被験者の四肢の皮膚温を経時的に測定する。 3. 清拭中の湯温及び体表温の変化 清拭用バケツに50℃の湯を10ℓ準備し、四肢の清拭(左上肢→右上肢→左下肢→右下肢)を行い、湯の温度変化と皮膚温の変化及び被験者の感想を記録する。同様に、54℃、58℃の湯を用いて実験を行い、結果を比較する。さらに、湯に沐浴剤を入れて同様の実験を行い、沐浴剤の入っていない場合と比較する。
「食に関する実習A：嚥下と体位及び食物形態」(3時間)	
<p>【目的】 看護者は嚥下困難のある対象に対しても、安全で安楽な食事介助が実施できなくてはならない。そこで、ベッド上での食事摂取介助を要する対象の食事介助場面を設定して、嚥下が容易な体位及び食物形態を実験実習によって確認する。また、食事行動を他人に委ねる体験をすることによって対象の気持ちを理解する。</p>	<p>【方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 体位の変化による嚥下の難易度 被験者は体位を変えながら、その都度介助されて一口ずつ同一の食物を嚥下し、嚥下難易度を評価し記録者に伝える。評価は5段階(飲み込み易い場合が5)で行う。体位は、①ベッドの頭部側をギャッジアップする(0度→15度→30度→60度→座位)②頭部の角度を変化させる(前屈位→垂直位→後屈位)③体位を変化させる(仰臥位→右側臥位→腹臥位→左側臥位)である。 2. 食物形態の変化による嚥下の難易度 体位を変えないで、食物の形態を液体・半固形物・固形物と変えて、嚥下難易度の評価を実施する。
「食に関する実習B：味覚」(3時間)	
<p>【目的】 看護者は臨床または研究目的でしばしば溶液を扱う。そこで、はじめに水溶液の作製のための基本的知識を確認し、実際に味覚の実験に必要な水溶液を作製する。さらにその水溶液を使って、舌の部位による四味の感じ方の差異を体験する。</p>	<p>【方法】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 溶液の調整 実習に使用する四味物質の溶液を、グループごとに作製する。 2. 味覚の実習 被験者は、10種類の溶液を1種類ずつ筆で舌尖、舌縁、舌体、舌根部の順につけ、味覚の有無、味覚の種類、程度を述べる。これを、溶液名を知らせずに被験者に実施し、記録をする。 グループ全員がP T C溶液をガーゼで舌表面全体に行き渡るようにつけ、味覚の有無、種類、程度を記録する。

実験実習に対する学生の反応

実験実習の評価について述べたが、これらは学生のレポートに記載された考察や感想、実習中の反応等から教員側が判断したものである。学生の方はこの実験実習をどのようにとらえているのであろうか。実験実習の今後のあり方や方向性を探るために、「看護方法論 I」と「看護方法論 II」が修了した直後の1年次生にアンケート調査を実施した。

1. アンケート調査の実施方法

アンケートは、実験実習に関する20の質問項目に「そう思う」から「思わない」までの5選択肢で回答を求める欄と、実験実習に対する意見・要望・感想等を自由に記載する欄で構成した。調査は1999年2月に実施した。調査の趣旨を説明し、本学科1年次生54人にアンケート用紙を配付し、その場で回収した。アンケートは無記名で提出は自由とした。有効回収数は54(100%)であった。

表3 「看護方法論II」で実施している実験実習の概要

「電法に関する実習」(4時間)	
<p>【目的】 電法は治療方法としても、対象の安楽をはかることを目的に看護ケアとしても用いられる。どちらにしても、より効果的に安全に用いる方法を知り援助しなければならない。 そこで、さまざまな方法で被験者に電法を実施し、バイタルサインや皮膚温、被験者の訴えなどから効果を検討する。</p>	<p>【方法】 1. コントロール 電法実施前に、被験者の安静臥床時のバイタルサインと電法を用いる部位の皮膚温を皮膚温測定機器(サーモラック)によって、経時的に測定する。 2. 電法実施中のバイタルサインと皮膚温の変化 グループごとに指定された電法(①氷枕、②空気抜きをしていない氷枕、③氷枕+氷頸、④氷枕+氷嚢、⑤湯タンポ)を実施する。バイタルサインと電法を用いる部位の皮膚温を経時的に測定する。被験者の訴えを聴取する。 電法に用いた氷水または湯の温度変化を使用前と使用後に測定する。</p>
「排泄に関する実習」(6時間)	
<p>【目的】 排泄の介助は最も基本的な看護技術の一つである。看護者は対象に対して、それぞれのニーズに合わせて、またプライバシーや現在の身体症状・心理状態を考慮して介助しなければならない。その前段階として、技術の理論的根拠を科学的側面から探究しておくことは重要である。 そのために、これまでにおさめてきた方法論と排尿や排便の生理学の知識をもとに、実験実習を体験し、現象を客観的にとらえ、説明できる能力を養うのがこの実習の目的である。</p>	<p>【方法】 1. 飲水量と排泄量の関係 被験者は実習前に排尿を済ませ、500mlの水を飲み、その後飲水をしなない。飲水から1時間ごとに排尿し、尿量を記録する。 2. 洗腸液の温度変化 使い捨てタイプの市販されているグリセリン洗腸110mlと60mlの中に、水温計を差し込む。ピッチャーに50℃の湯を1.5ℓ入れ、その中に、グループごとに指定されたサイズと本数のグリセリン洗腸を浸す。経時的にグリセリン洗腸液の温度が40℃になるまで、温度変化を観察し記録する。 3. 排泄習慣チェック 自分の排泄習慣をチェック用紙に記録する。 4. 便器の温度とバイタルサインの関係 ショートパンツを身につけた被験者が20℃の便器と、42℃の湯で暖めた便器に腰掛けた場合の血圧と脈拍の変動を観察する。血圧と脈拍の測定は、指装着型プローブと連続血圧記録装置を用いて行う。 5. 腸音記録ならびに飲水の腸音に及ぼす影響 安静臥床している被験者の腸音を聴診器で聞く。その後心音用マイクロフォンによって被験者の腸音を導出し、腸音を音ならびにオシロスコープやペンレコーダーの波形として観察する。被験者に100mlの水を一気に飲ませ、飲水2分前から3分後までの腸音を記録する。腸音の直接波形と処理波形によって、飲水負荷前後を比較する。</p>

2. アンケート調査の結果および考察

アンケートの20の質問項目に対する回答結果を表4に示した。自由記載欄の回答は表5にまとめた。

20の質問項目に対する回答結果をみると、実験実習に対して全体的には高い評価が得られたと考えられる。

ほとんどの項目において「そう思う」「ややそう思う」という肯定的な回答が約8割以上を占めているなかで、「あまりそう思わない」「思わない」という否定的な回答が比較的多い項目について検討する。まず、「実験実習の量は適切だった」「実験実習の時間は適切だった」「実験実習はもっと多くても良い」という量に関する項目について、約15%の学生が否定的な回答をした。一部の学生には量的に負担になっている様子が明らかになった。これについては、実験実習の内容を精選したり、実験実習の間隔をあけたり対応を検討したい。また、他の教科目のテストや演習等との重なりも影響すると思われるので、考慮が必要であろう。自由記載欄には、各実験実習の時間配分に対する意見が6人から寄せられている。合わせて見直しを行いたい。しかし、実験実習において最も負担が大きいであろうと推察されるレポートについては、「実験レポートを書くことは良い学

習になった」という項目に対して、約9割の学生が肯定的な回答をしている。学生は、多少大変だという思いはあっても、自分の勉強になるという認識を持っているといえる。自由記載においても裏付けるように、「実験レポートは大変だが、レポートを書くことによって理解がさらに深まったと思う」という記述がみられた。

次には、実施時期の問題があげられる。「実験実習はもう少し高学年になって実施した方が良い」という項目に対する回答は、各選択肢に分散した。意見が分かれたのは、自由記載欄に1人の学生が記入しているように、実験実習全体というよりも、実験によってはもう少し高学年になってからの方がわかりやすい項目があるという理由からだと思われる。これについても、内容の吟味を重ねていきたい。

実験実習の量や、実施時期の問題以外の実験実習の方法について、ほぼ満足していると受け取れる学生の反応が得られた。理解度や学習効果についても、本実験実習の目的である「看護方法の根拠がわかった」「実験を通して看護方法の根拠を知る必要性に気がついた」という項目に対して、約8割の学生が肯定的な回答をしており、学生自身にも達成感が芽生えているものと推測される。さらに、「実験実習

表4 実験実習に対する学生へのアンケート調査結果—質問項目に対する回答結果—

質問項目		そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	思わない
準備	1. 実習書の内容は適切だった	39 (72.2%)	9 (16.7%)	3 (5.6%)	3 (5.6%)	0 (0.0%)
	2. 実習書の説明は適切だった	29 (53.7%)	15 (27.8%)	6 (11.1%)	4 (7.4%)	0 (0.0%)
実施	3. 実験実習の内容は適切だった	30 (55.6%)	16 (29.6%)	8 (14.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	4. 実験実習の量は適切だった	18 (33.3%)	17 (31.5%)	11 (20.4%)	7 (13.0%)	1 (1.9%)
	5. 実験実習の時間は適切だった	20 (37.0%)	15 (27.8%)	9 (16.7%)	9 (16.7%)	1 (1.9%)
事後	6. 実験実習の実施時期は適切だった	21 (38.9%)	15 (27.8%)	15 (27.8%)	3 (5.6%)	0 (0.0%)
	7. データを整理することは良い学習になった	36 (66.7%)	12 (22.2%)	4 (7.4%)	1 (1.9%)	1 (1.9%)
	8. 他グループとデータを交換することは良い学習になった	34 (63.0%)	14 (25.9%)	4 (7.4%)	1 (1.9%)	1 (1.9%)
	9. 実験レポートを書くことは良い学習になった	37 (68.5%)	12 (22.2%)	2 (3.7%)	2 (3.7%)	1 (1.9%)
理解	10. 看護方法の根拠がわかった	25 (46.3%)	19 (35.2%)	8 (14.8%)	1 (1.9%)	1 (1.9%)
	11. 実験レポートの書き方がわかった	22 (40.7%)	15 (27.8%)	13 (24.1%)	2 (3.7%)	2 (3.7%)
効果	12. 看護方法の実践に役立つデータが得られた	25 (46.3%)	21 (38.9%)	8 (14.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	13. 実験を通して看護方法に興味を持てた	30 (55.6%)	15 (27.8%)	8 (14.8%)	1 (1.9%)	0 (0.0%)
	14. 実験そのものに興味を持てた	24 (44.4%)	19 (35.2%)	8 (14.8%)	3 (5.6%)	0 (0.0%)
果	15. 実験を通して看護方法の根拠を知る必要性に気がついた	31 (57.4%)	12 (22.2%)	9 (16.7%)	1 (1.9%)	1 (1.9%)
総合評価	16. 実験実習はあった方が良い	48 (88.9%)	5 (9.3%)	1 (1.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	17. 実験実習はもっと多くても良い	24 (44.4%)	6 (11.1%)	16 (29.6%)	7 (13.0%)	1 (1.9%)
	18. 実験実習はもう少し高学年になって実施した方が良い	6 (11.1%)	7 (13.0%)	14 (25.9%)	21 (38.9%)	6 (11.1%)
	19. 実験実習は楽しかった	28 (51.9%)	19 (35.2%)	6 (11.1%)	1 (1.9%)	0 (0.0%)
	20. 実験実習は意義が大きいと思う	39 (72.2%)	12 (22.2%)	3 (5.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

(n = 54)

表5 実験実習に対する学生へのアンケート調査結果—自由記載欄の内容—

記載内容	人数
さまざまな体験ができて、楽しく学べた	7
実験実習の内容によって時間が余ったり、足りなかったりするので、時間配分を考えて欲しい	6
実験実習によって、看護方法の根拠が理解できたので、看護方法に興味があった	4
内容が多すぎて混乱することがあった	4
実験実習の結果は臨床で役立つと思った	3
実験レポートは大変だが、レポートを書くことによって理解がさらに深まったと思う	2
実験実習をもっと増やして欲しい	2
実験実習はクラスの人と仲良くなれ、友情を深める機会になった	1
もっと高学年になって実施した方が、わかりやすい内容の実験実習項目もあった	1

はあった方が良い」という項目に対して98.2%、「実験実習は意義が大きいと思う」という項目に対して94.4%の学生が肯定的な回答をした。学生が実験実

習をすることの意義を理解したうえで、看護方法を学ぶ授業形態の一つとして実験実習を受け入れることが確認された。そして、「実験実習は楽しかった」という項目に対して87.1%の学生が肯定的な回答をしている。自由記載欄にも「さまざまな体験ができて、楽しく学べた」と7人が記入していた。どんなに意義がある授業でも苦しいばかりでは学習効果は長続きしないであろう。中條¹³⁾も教育環境を整える場合に楽しいと思える環境づくりが大切であると述べている。実験実習が楽しいという反応が、学生から返って来たことは、看護方法の教育に実験実習を取り入れたことが成功しているといえるのではないだろうか。

おわりに

著者らは看護学生に看護方法を教育する場合、その看護方法の手技を教員から学生に受け渡すような、従来から行われてきていた教授方法に疑問を抱いてきた。ギネ¹⁴⁾も、看護教育において「手順や技術を

クラスで教える場合、その手順や技術を複写して学生に渡す傾向がある。このような場合、学生は実際から遊離した事がらや手順を記憶しようとしがちである。すなわち、学生はそのなかに含まれている科学的原理を理解することよりも、渡された紙面の実際から遊離した事がらや手順を丸暗記するようになるのは明らかである。」と述べている。看護方法を根拠から学ばせるには、実際にいくつかその根拠を検証する体験が必要であると考え、実験実習を開発した。現在6項目の実験実習を開発し、看護方法の授業に取り入れているが、学習効果も高く、学生も看護方法を学習する形態として違和感なく受け入れている。学生へのアンケート調査の結果から、ほとんどの学生が実験実習は意義が大きく、あった方がよいと思っていることが明らかになった。また、楽しいとも多くの学生が回答しており、興味を持って

生き生きと学習できる方法であることがわかった。

しかし、看護教育においては、実験実習という教授方法はほとんど取り入れられていない。今回開発した実験実習を看護方法の教育に導入する試みは、まだまだ先駆的段階である。そのために、いくつか見直す必要のある問題点も浮き彫りとなったが、全体的には学生の反応も良く、今後発展すべき教授方法ではないかと思われる。

学生を引きつけ、興味を持続させる教授方法が模索されている現在、看護教育はもっと実験実習の意義に着目すべきではないだろうか。多くの看護教育の場で、実験実習が実施されることが望まれる。

(本研究の一部は第26回日本看護研究学会学術集会上において発表した)

文 献

- 1) 庄司さみえ (2000) バイタルサインの授業における実証的演習の試み. 日本看護学教育学会誌, **10**(2), 92.
- 2) 柴田千衣 (2000) 基礎看護技術教育における検証的方法の試みー「身体の清潔」の授業を通してー. 第31回日本看護学会抄録集ー看護教育ー, 76.
- 3) 坪井良子, 松田たみ子編 (1997) 考える基礎看護技術, 初版, 廣川書店, 東京.
- 4) 深井喜代子, 關戸啓子 (1999) Evidence-Based Nursing 実験実習を導入した看護技術教育・1ー(総論)看護技術教育に実験実習を導入した根拠と目的ー. 看護教育, **40**(6), 490-494.
- 5) 關戸啓子, 深井喜代子 (1999) Evidence-Based Nursing 実験実習を導入した看護技術教育・2ー(各論1)室内環境に関する実習. 看護教育, **40**(7), 570-574.
- 6) 深井喜代子, 關戸啓子 (1999) Evidence-Based Nursing 実験実習を導入した看護技術教育・3ー(各論2)清拭時の湯温と皮膚温の変化に関する実習. 看護教育, **40**(8), 722-728.
- 7) 關戸啓子, 深井喜代子 (1999) Evidence-Based Nursing 実験実習を導入した看護技術教育・4ー(各論3)食に関する実習(その1):嚥下と体位および食物形態に関する実習. 看護教育, **40**(9), 810-813.
- 8) 深井喜代子, 關戸啓子 (1999) Evidence-Based Nursing 実験実習を導入した看護技術教育・5ー(各論4)食に関する実習(その2):味覚に関する実習. 看護教育, **40**(10), 888-892.
- 9) 關戸啓子, 深井喜代子, 山口三重子 (1999) Evidence-Based Nursing 実験実習を導入した看護技術教育・6ー(各論5)褥法に関する実習. 看護教育, **40**(12), 1090-1094.
- 10) 深井喜代子, 關戸啓子 (2000) Evidence-Based Nursing 実験実習を導入した看護技術教育・7ー(各論6)排泄に関する実習. 看護教育, **41**(1), 70-75.
- 11) レバ・ド・トニエ, マーサ・A・トンプソン (1993) 教授活動の諸要素. 中西睦子, 荒川唱子訳, 看護学教育のストラテジー, 初版, 医学書院, 東京, pp79-80.
- 12) 汐見稔章 (1996) 早期教育が危ないー臨床現場からの報告ー, 日本評論社, 東京, pp31-43.
- 13) 中條和子 (1999) 教育環境を整えるー看護が楽しいと思える環境づくりー. 看護教育, **40**(6), 418-422.
- 14) キャスリーン・K・ギネ (1972) 教育方法. 稲田八重子訳, 看護教育の目的と方法, 初版, 医学書院, 東京, pp158-161.

(平成12年12月12日受理)

Teaching Nursing Practice Using Experimental Evidence and the Students' Response

Keiko SEKIDO and Kiyoko FUKAI

(Accepted Dec. 12, 2000)

Key words : EXPERIMENT, EVIDENCE, NURSING PRACTICE, STUDENTS' RESPONSE

Abstract

It is important to educate nursing students not only the techniques of nursing care but also to make them understand the underlying evidence. Through a series of trials and errors over the years, the authors have developed a new approach to teaching nursing practice. At present, six courses are being taught using this new teaching process. Ninety-eight percent of the students participating in the project felt it was necessary and 94% found it very meaningful. It is evident that most nursing students are in favor of the evidence-based way of teaching nursing practice, and the authors believe that this new approach should be widely adopted in nursing education.

Correspondence to : Keiko SEKIDO

Department of Nursing, Faculty of Medical Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.10, No.2, 2000 255-261)